
二重生活。

原辺 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二重生活。

【Nコード】

N9587P

【作者名】

原辺 鷲

【あらすじ】

突然ですが、世界を超えて迷子になってしまいました。

お世話になっている貧乏孤児院に恩返しをするために、昼は孤児院の手伝い、夜はギルドの冒険者（男装）として活動中。

あ、あと異世界オプシオンで基礎能力チートになってしまったみたいです。

淡々とした主人公が、無自覚で色々やらかす異世界ライフ（＋振り回される周りの人々）の物語。

※話が進むにつれて軽い逆ハ・軽いグロが出てくるかもしれませんが、そういうのが嫌いな方はご注意ください。

第一話 今までのいきさつ。

コンコン

「ユリアさーん、洗濯終わりましたよー」

空の籠を脇に抱え、院長先生の部屋に入る。

「あら、早いね。ありがとう、ユウ」

出迎えてくれたのはここーウィリスティア孤児院の院長先生、ユリアさん。

いつも穏やかに微笑んでいて、孤児院の皆に慕われているおばあちゃん先生だ。

プラチナブロンドの髪には大分白髪が混じっているが、それがまた落ち着いている感じを醸し出している。

綺麗な水色の瞳にはこっそり憧れている。うらやましい。

「いえいえ、これくらいどうってことないです。次は何をしたらいいですか？」

「ふふ、仕事熱心ね。でも、ユウが朝から働いてくれたからもう今日やることは無いの。午後はゆっくりして下さいな」

「はい。・・・ユリアさんもたまには休んでくださいね」

心配しなくても私は大丈夫、と微笑むユリアさんに一礼して院長室を出る。

ここに来てもう半年になるだろうか。

本当、あつという間だったと思う。やはり慣れない環境だと時間が早いというのは本当なんだと実感する。

ん？ここに来る以前はどこに居たのかって？

普通に日本で大学生をしていましたとも。

・・そう。私、滝沢 夕はどうやら世界を超えて迷子になってしまったようなのだ。

いつも通りに目が覚めて、いつも通りに大学に行こうとして、いつも通りに授業中寝て・・・目が覚めたら私は森の中に居た。

見渡す限り木木木木木・・・いつからうちの大学の教室は森になったんだ？

いや、これは夢だ。きっと目が覚めればあのつまらな・・・いや、高度な授業を教授が続けているに違いない。

とベタにも自分の頬をつねってみたが、普通に痛い。あ、爪のあとついた。

むしろ、目覚めるというより寝起きで目が冴えてる状態である。よって夢でないことが確定。

その後は、とりあえず人を探そうとふらふらしていたところを孤児院の子供たちに発見され、この孤児院に連れてこられた。

周りの人たちの髪・瞳の色がマールブルチョコレートばりのカラフル具合であることは見なかったことにしながら、代表者らしきおばあちゃん（ユリア先生）に事情を説明した。

―気づいたらあそこに居ました、ここはどこですか、と。

そしたら返ってきた答えは『エルヴィスト王国のルイスの町のはずれにある孤児院』だった。

・・・きっと私が地理に疎いから知らないだけだ、そうに違いない。

そう自分に言い聞かせながら地図を見せてもらうと、みごとに知らない大陸でした。ありがとうございます。

こんな大陸地球にないって。

そうして途方に暮れていた私に、勘違いをしたユリアさんがこう言ってくれた。

『記憶が戻るまで、ここに居なさいな』

それはまさに天の声だった。

私は記憶喪失ではないけど。多分、場所も何も分からないと言ったからそう勘違いしたのだろう。

まあ、迷子（世界規模）であるなんて、言っても簡単に信じてもらえないとは限らないし、それでせっかくの寢床を追い出されては適わない。なので、記憶喪失という設定で行くことにした。

答えは勿論イエス。

こうして、私はこの孤児院でお世話になることになった。

私がなぜこの世界に来るハメになったのか分からない。

一応、モンスターだとか、魔法だとか、そういうファンタジー要素はあるのだが、国に召喚されたとか、魔王の侵略があるとかいうことは一切無い。というか、魔王筆頭の魔族とはむしろ普通に交流があるらしい。平和万歳。

だから、私は『迷子』なのだろう。

呼ばれたわけでもなく、この世界にフラリと来てしまったのだから。

そんな私の当面の目標は――金を稼ぐことである。

第一話 今までのいきさつ。(後書き)

初投稿です。ガクガクブルブル。

まだ話の導入部分でしかないですが、まったりとお付き合いください。

感想・誤字脱字表現の指摘大歓迎です。

第二話 職探し。(前書き)

主人公の外見年齢について修正しました；
(1月10日)

第二話 職探し。

「あーどっかに職ないかな職ーがっぽり稼げる職ー」

女らしさの微塵も感じられない台詞をはく。

先ほどユリアさんに『ゆっくり休んでくださいな』といわれて一時間、ユウは街中を職を求めて歩き回っていた。

しかし、探せど探せど職は見つからない。

この世界には求人情報誌などは当然無く、これほどまでにホッペッパーを求めたのは人生初である。

ーしかし、なぜこんなにも職が必要なのかというと

彼女の世話になっている孤児院は貧乏なのだ、果てしなく。

孤児院はユリアさんと、食事を作ってくれるミーナさんと、育ち盛りの8人の子供たち、そして私の計11人である。

それに対して収入は皆でせつせと作るクッキーや栽培したお花、ごく偶に親切な人がくれる寄付金のみ。当然ジリ貧生活である。

屋根は確認しただけで4箇所雨漏りしてるし、床はどこどころ抜けそうになってるし、服はつぎはぎの服をなんとか着てるし、食事は酷い時には豆スープだけのときがあるし……

こんな状況のところに、私というお荷物が入ってしまったのだ。ユリアさんがなんとか家計をやりくりしてくれているとはいえ、孤児院の家計簿は火の車状態である。

他人を世話する余裕なんてないのに。

それなのに、ユリアさんも、ミーナさんも、子供たちも私を受け入れてくれた。

だから、私はなんとしても金を稼いで恩返しをしたい。

・・・と思いつつも見つからないのが現状であるのだが。

「・・・はあ。なんでこんなに仕事無いかなー」

ため息をついてベンチに座る。

あー空が青い、と現実逃避しそうになる。危ない危ない。

風が吹いてユウの黒い髪をなでる。

この国は現在日本で言う春のような気候で、風がなかなか強い。

ヒラ

「ん？なんだこれ」

一枚の紙が風によって飛んできた。

「えーっと、『モンスター退治・採取・護衛、困ったときには冒険者ギルドロイス支部まで！』って、へーさすが異世界ギルドなんてあるんだー……ギルド？」

冒険者ギルド。

ギルドに登録した冒険者が、ギルド経由で仕事を斡旋してもらう。決まった賃金はないが、逆に言えば実力があれば好きなだけ稼げる職業だ。

うん、これしかない。

自分がそこまで稼げるとは思えないが、簡単な依頼をちまちまこなすだけでも孤児院の家計の足しにはなるだろう。

それに、自分にはアレがある。

異世界補正という名のチートが。

そう、嬉しいことになると異世界補正がついていたのだ。

国のお偉いさんに召喚されたとか、運命のなんとらんたらとかじゃないので、特別な力とかは期待してなかったのだが、神様の最後の情けか能力アップはしてくれていたらしい。

というか、神様とかいるならそもそも元の世界に返せと言いたいが。

初めて気がついたのは、孤児院で薪割りを手伝ったときのことだ。それ以前から体が軽いなーとか、遠くまで良く見えるなーとかは思っていたのだが、自分のこの異常な能力を自覚したのはこのときである。

孤児院の子供たちの中で最年長のカイル君（14歳）が薪割りをしてて大変そうだったので手伝うことにしたのだ。

最初はカイル君も「お嬢様にそんなこと・・・っ！」などとよく分からんことを言って斧を渡してくれなかったのだが、居候の身で何もしないなんて耐えられないと粘ったところしぶしぶ斧を渡してくれた。どうやら女の私は薪割りは無理だと思っていたようだが。

変に思ったのは斧を手渡されたとき。

全く斧の重さを感じなかったのだ。

まるで棒切れを持っているような感覚だった。

不思議に思ったが、まあここは異世界。きっと鉄より軽くて丈夫な金属があるのだろうと思い、気を取り直して丸太の上に用意された木片に斧を振り下ろした。

スコーン

あっさり切れた。下の丸太まで。

え、丸太？

断面は綺麗に平らで、みごとに真っ二つだった。手ごたえは全く無かったのに。

さすが異世界の斧は性能が違うなーと感動していたら、隣に居たカイル君に詰め寄られた。

どうやらこれは元の世界と同様ありえないことらしい。

その後「一体何者なんですか!？まさか騎士の家系のっ・・・!」とかまた良く分からないことを言い出したカイル君をかわすのが大変だったのはいい思い出だ。

つまり、私は馬鹿力になってしまったみたいなのだ。

その後色々ためしてみたところ、足は速くなってるわ、走り回っても全く疲れないわ、ジャンプしたら二階まで届いちゃうわ・・・身体能力全般が格段に上がったようなのです。補正万歳。

まあ、そのときは女の子がこんなムキムキになりたくなかったのに・・・
・と思っていたが・・・

まさかこんなところで役に立つ日が来ようとは夢にも見なかった。いくら冒険者が危険だといっても、危険な依頼を避ければこの身体能力ならまあまあいけるだろう。

職への道が見えてきたところで気分が良くなった私はギルドに向かうことにした。

のだが……。

はい、結論から言いますと受付で登録拒否されました。畜生。

曰く、

「お嬢さんには無理だ」

「前衛希望？ 後衛・治癒じゃなくて？ お前さんみたいな小さな子が剣を扱えるはずないだろ」

「家出したなら親御さんが心配してるだろうから早く帰ってやんな」

だと。完全になめられているとしかいいようがない。

どうやら日本人の童顔パワーが遺憾なく発揮されたようで、14歳くらいの家出娘に見られたらしく、加えてギルド登録の際に前衛・後衛・治癒の中から選択して登録するのだが、私みたいな『小さな女の子』が前衛志望なのはありえないそうだ。

こっちだって後衛・治癒にいききたいが、魔術を使ったことが無いのだから仕方がない。

そもそも異世界人の私に使えるのかさえ分からないし。
大体私は19歳だったの。女の子じゃない。

「残念だったなーせめて男だったら軽い仕事は任せてやれたんだが
なーはっはっは」

というおっさんの言葉に、もはやこれ以上の交渉は無駄だと判断して
ギルドを後にしたのだった。

最後の希望まで潰えて軽く意気消沈。

あーあ、せっかく稼げるところが見つかったと思ったのに……。

孤児院への道のりをとぼとぼ歩く。

もう気づけば夕方だ。空は赤くなり、街灯もつき始めている。

「あー、男だったらすんなり入れてもらえたのかなー。なんで私女
なんだろ……」

……んん？男？

そうだ、その手があったか。

いいこと思いついた、と孤児院へ駆け出した。

第二話 職探し。(後書き)

ユウさん身体能力チートです。

魔王とかいたら単身張り合えるくらいには強いです。

しかし、彼女自身は「異世界なんだし、一般の男性よりはちよつと上かなー」くらいにしか思ってません。

第三話 試験。

はい、着替えてきましたー。

現在の格好は黒いシャツとズボンに髪をひとつにまとめ、赤いマフラーと黒い手袋とゴーグルを着用しているといった、なんとも不審者としか言いようの無い格好だ。

シャツとズボンはこの間パン屋のおばさんにもらってカイル君用に直していたものを拝借。

マフラーと手袋とゴーグルは孤児院の倉庫にあったやつを借りてきた。

・・・って全部借り物だけれど。

それにしても全身黒づくめな気はするが、新しく買うお金も無いので我慢する。

なんでこんな格好をしてるかといえば、俗に言う男装というやつです。

ちゃんとさらし巻いたし、マフラーで顔の下半分、ゴーグルで上半分隠したので、後は声をあまりださないようにすれば大丈夫・・・だと思う。

もともと女にしては声はそんなに高くないので、あまりしゃべりすぎなければバレないだろう。

これならギルドに入れてもらえるはず。

「すみません、ギルドに登録したいのですが」

「・・・名前、年齢、希望は」

しまった。名前考えるの忘れてた。
何かないか・・・私はユウだから・・・

「・・・ヨル、19歳、前衛」

『夕』だから『夜』って苦しいけど・・・ま、ファンタジー世界だしありだろう。

受付のおっさんにジロジロ見られる。こっちみんな。もしかしてバレたのか。

「よし、いいだろう。じゃあ早速試験を受けてもらおうか・・・リーブ！相手をしてやってくれ」

あー良かった良かったバレなかった・・・って

試験!?

え、何それ!?

「・・・試験？」

表には動揺を出さないようにする。

あくまで冷静に、冷静に。

「知らなかったのか？ギルドに入るときには始めにランク決めの試験をやるんだ。まあ、別に命賭けってわけじゃないから安心しろ。ただ、ランクによって受けられる仕事が決まるから、高額の依頼を受けたいなら気合入れていけよ」

いや、高額とかいいです。地道に稼ぐんで。

最低ランクでいいです、と言おうとしたところ、奥から赤茶色の髪のお兄さんが出てきた。

先ほど呼ばれたリーブという人だろう。

年は同じくらい。髪は短く、瞳は髪と同じ赤茶だ。腰には二振りの剣が差してあることから、彼は剣士である事が分かる。いや、二振りということは双剣士か。

しかし、冒険者（なのだろう）の割に雰囲気は穏やかで、人好きのする感じがする。そして美形。これはもてるだろうなーなんて余計なことを考えてみる。

「はじめまして。冒険者ギルドルイス支部のリーブ・スタンレーだよ。よろしく！」

笑顔で手を差し出すリーブさん。その笑顔まぶしいです。

・・・そんなに笑顔で握手を求められては断れるはず無いって。

「・・・ヨル、です。よろしく願います」

こちらも手を差し出す。握手をしたのはほんの一瞬だったが、リーブさんの手はかなりがっしりしており、経験を積んだ冒険者であることが素人の私にも分かった。

いきなり本職の人が相手とは・・・。

まあいい。どうせランクを計るだけなのだし、受付のおっさんの言

ったような高額依頼を受けるつもりもない。というか、そんなの受けられる実力は無い。
気楽にいくことにしよう。

ついてきて、と言われ、私たちはギルドの奥の部屋へ向かった。

「さてと、じゃあ早速始めたいと思うんだけど・・・ヨルは武器は何を使ってるんだい？」

あー、武器か。すっかり忘れてた。

まあ、元々そんなもの孤児院にあるはず無いし、買うお金も無いので同じことなのだが。

それにはこの馬鹿力があるのでそこの雑魚モンスターなら殴るだけでもダメージを与えられるだろう、多分。

しかし、流石に現職冒険者（しかも強そう）を相手に素手っていう

のものなあ・・・。

「剣を少々。・・・でも今日試験があるとは思ってなくて・・・」

ということでした。ごめんなさい。

こうなったら相手も素手で相手してくれるかなーなんて、

「ああ！それならここにある剣を貸すから好きに使ってくれてかわないよ」

ことはありませんでした。ですよねー。

人生そんなうまいことはないってことですね、はい。

仕方ないので壁に掛けてあった剣を一本手に取る。

やはり補正のおかげで重さは全く感じないわけだが、問題は私が今まで一回も剣を振ったことなどないということだ。致命的な問題とである。

片や経験豊かな冒険者、片や力がちょっと上がっただけのズブの素人。

答えは決まりきっている。

「それにするんだね。じゃあ俺も同じものを使うよ」

リーブさんも私が手に取った剣と同じものを手に取る。

これはリーブさんなりの気遣いだろう。愛用の剣がないということ
で、自分も同じ剣を使って差が出ないようにしようとしてくれたの
だ。

「・・・貴方は自分の剣を使ってもかまわないのですが」

「大丈夫だよ。単なる力試しだし、この方が実力も計りやすいし、
ね？」

うわー。すごくいい人だこの人。
本当、相手がこの人でよかった。

「じゃあ始めようか！」

「・・・はい」

どうか怪我しないようにお願いします。切実に。

互いの雰囲気が変わる。

リーブさんは普段双剣を使ってる癖なのか、右手に剣を持って前で

横に構えるという少し変わった構えをとっている。隙は全く無い。流石冒険者。

私は構えも何も知らないのです、とりあえず右手に剣を持ち、切っ先は下に向けたまま相手の出方を伺う。下手に構えて動けなくなるよりは、相手の動きが見えた方がマシだ。

「変わった構えだね。そんなに無防備で大丈夫なのか、な！」

キンッ

リーブさんが踏み込んで横に薙いだ剣を自分の剣で受け止める。

そんなに力はこめられていない。様子見の一撃のようだ。

とりあえず力を入れて相手を押し返す。

しかし、そこは伊達に経験を積んでるわけじゃないリーブさん。軽く後ろに飛ぶと再び私の間合いの外に出た。やっぱり力押しじゃ逃げられる、か。

キン、カキン、キイン

数度打ち合いになるも、お互いにお互いの剣を受けて避けるので決定打にならない。

このまま打ち合ってもキリが無いので、先ほどよりも少し力を入れて打ち込む。

ギインッ

「っ、やるじゃないか」

受け止められてしまった。

しかもそれはこっちの台詞ですって。

そして、再びにらみ合いになる。さて、どうやって攻めるかな。

技術では及ばない。

力押しでも逃げられてしまう。

経験も向こうの方が上。

こうなったら―スピードで翻弄するしかない。

ぐっと足に力を入れ、正面からリーブさんに突っ込む。

勢い良く突っ込む私にリーブさんは正面からの攻撃に構える。

でも―狙いはそこじゃない。

「！」

剣が触れ合う直前、体をそらし、リーブさんの後ろに回りこむ。

思いもよらぬ私の動きに反応が遅れたリーブさんの背中に剣を振り下ろす。

ガキンッ

「・・・・・・・・」

嫌な金属音。

目線をしたに下ろすと、折れた剣先が二つ。

私の振り下ろした剣とそれを防ごうとしたリーブさんの剣がぶつかり、なんと折れてしまった。剣が折れるって・・・・・・・・そんな馬鹿力だったか私。

しかもこの剣借り物だった・・！

弁償、という二文字が頭をよぎる。

「・・あの、剣、申し訳ない」

「・・・・・・・・」

反応が無い。あれ、本当にまずいか・・・？

「リーブさ「あはははは、まさか剣を折られるとはね！すごいヨ
ル！」」

剣を折られて爆笑ってどうしたイケメン。頭打ったはずは無いのだが。

目じりに涙まで浮かべて笑っている。

「ははは・・・、ごめんごめん。こんなこと初めてだからさ。まさか試験やって剣を折られるんて思っても見なかったよ」

「・・・それはどういうことですか」

「さっき言ってなかったけど、俺のランクはS級。冒険者として最上位のランクに就いているんだ。そんな俺の剣を新人が折るなんて、並大抵のことじゃないよ」

はい？ S級ツテナンデスカ。

つまりそれは私は冒険者の中でも最上位の実力者と打ち合いしていたと。

いやいやいやいや、しょっぱなからなにやらすんですかこのギルド。いくら新人だから手加減してくれてるとはいえ、いきなり新人とS級あてるなんて・・・。

大事にならなかったから良かったものを。まあ、無事に終わったからいいか。

今回はリーブさんもかなり手を抜いてくれたようだし。

じゃないとあんなに打ち合えるはずが無い。

本当このイケメンいい人だ。

「・・・それで剣はどうすれば」

「ああ、それはその辺に置いておいてくれ。後で片付けておくから。
・・・それで、今回の試験結果だが、君は文句なしのB級スタート
だ」

は？Bってなんかちょっと高めじゃないでしょうか？
そんな簡単にポンと出しているのか。

まあ、さすがにAとかSとかはいきなりでないか。

そんなこんなで私のギルド登録は無事(?)終わったのだった。

・・・自分がどんな爆弾を落としたのか全く気づかないまま。

第三話 試験。(後書き)

はい、ユウさんのチートっぷりが少し出せました。

ちなみに、リーブさんは始めは手を抜いてましたが、途中から本気です。

さらにギルドの級システムですが、AとSはある一定のランクと数の仕事をこなさなくてはいけないので、試験で認定される最高ランクはBです。

ユウさんその辺も全く気づいていません。

第四話 人間関係は難しい。(前書き)

ら、ランキング入りしている・・・だと・・・？

読んでくださっている方、本当にありがとうございます！

第四話 人間関係は難しい。

「ごくろうさん。報酬の5万ギルだ」

「・・・どうも」

お金が入った袋を受け取る。うふふふ、重い。

今回は街の近くの森で大量繁殖したレッドファングの討伐だったのだが、いつもより少し報酬が多い。

なにしろ、レッドファング自体はそれほど手強いモンスターというわけではないのだが、何分数が多かったのだ。

普段は多くても5、6匹ぐらいしか同時に現れないはずが、なんと気づけば30匹ぐらいのレッドファングに囲まれているではありませんか。名前の通り赤い毛並のわんこ（狼）なので一面赤だった。

あの光景は軽く現実逃避したくなるレベルだ。

とりあえず、全体攻撃できるような攻撃手段も持ち合わせていないので、ひたすら剣で叩き切った。

こういうとき魔術が使えれば一気に燃やすなりなんなりできるのに・・・。

ちなみに剣は街の武器屋の一番安いものを購入。最初は素手で頑張ろうと思っていたのだが、依頼リストの「スピアリー・ビーの幼虫退治」の文字を見て路線変更することにしたのだ。

理由はそんなもの素手で触れたくないから。

幼虫と聞けば大体想像はつくかもしれないが、一言で言えば巨大な蜂の幼虫である、しかも体長1メートル強の。別に私は虫が特別嫌いとかではないのだが、さすがにそのような常軌を逸したサイズの幼虫に触れるには抵抗があった。

まあ、昆虫系のモンスター退治を引き受けなければいい話なのだが、万が一他の依頼でそのようなモンスターに遭遇したら困る。というわけで、剣を買うことにしたのだった。

今では一本1000ギルの彼（彼女？）は私の愛剣である。

ギルドに入って一ヶ月。

私は孤児院恩返し大作戦のために、日々依頼をこなしている。

あまり遠くまでは行けないので近場の依頼に限って受けているのだが、それでも思ったより稼ぎがいい。

というよりも、こんなの受けとって良いのかというくらいの額を貰える事もある。

まあ貰えるものは貰っておく主義なので遠慮なく受け取るが。

そのおかげもあって、この三週間の間にささやかながら孤児院に様々な形で還元することができた。

まず初めに久々の肉料理を振舞ったのだが、肉は一ヶ月以上食べていなかったなので、皆とても喜んでくれた。最終的には子供たちの間で肉争奪戦が勃発したが。

次に孤児院の屋根の修理をした。今まで雨が降ると床に水溜りが・
なんて状況だったが、大工の親父さんのおかげで無事修理完了。親

父さんいわく、今までよくここまで放置できたな、と。

そのまた次には、最年少のリアちゃん（5歳）に絵本を買ってあげた。リアちゃんは本好きのおとなしい子なのだが、孤児院にある絵本は読みつくしてしまっただけ、同じ本を何度も読んでいるのを見て買わずには居られなかった。

しかし、ちまちまと皆に恩返しをしていたわけなのだが、一つ悔やむべきは大々的に金銭物品を渡せないということである。

そう、ギルドで稼いでいたのに『ちまちま』としか返せなかったのだ。

なぜなら私がギルドで冒険者として仕事していることは皆に秘密にしているからである。

冒険者として仕事をしているなどといえば、そんな危険な――と絶対に反対される。それに、ユリアさんたちに余計な心配をかけたくない。

なので、皆には『街の食堂で働いている』と言った。完全に嘘だけだ。

場所を聞かれたが、働いているところを見られるのは恥ずかしいと言っただけで済ましておいた。仮に探そうとしても、ルイスの街は規模としてそれなりに大きい部類に入るので、バレる可能性は低いだろう。

だが、さすがに食堂の仕事でそんなにお金を稼げるはずは無く、いきなり大金を持っていったら怪しまれてしまう。

なので当面の間はコツコツと恩返しすることにしたのだ。

初めのうちは慣れない戦闘や依頼に苦労したが、一ヶ月たった今ではなんとか軌道に乗ってきたと思う。

が、一つ悩みの種が・・・

何故かギルドの冒険者たちに遠巻きにされているのだ。

私がギルドに入るところをチラ見しながら小声で何か話しているし、私と目を合わせると凄い勢いで目を逸らされるし。私は寧猛な肉食獣か。

別に何か問題を起こしたつもりはないし、誰かに恨まれることをした覚えも無い。

男装してるのがバレるといけないので、積極的に人の輪に入れないのは仕方ないと思うが、ここまであからさまに避けられると流石にショックを受ける。

職場の人間関係って難しい。

だれかに相談しようにも、相談したら色々他のことも話さないといけなくなるのでできないというこのジレンマ。

しかし、物事には例外というものがあるとはよく言ったもので、中には普通に接してくれる人もいる。

お、話をすればなんとやら・・・向こうから見慣れた赤茶が歩いてくる。

「お、ヨルじゃないか。無事仕事終わったんだな、お疲れ様！俺もちよūd依頼の報告行ってきたところださ」

例外その一、我らがイケメンリーブさん。

試験のときにお世話になって以来、何かと世話を焼いてくれる良い人だ。

いつもニコニコしてる彼に何度癒されたことか。

「お疲れ様です、リーブさん。・・・今回の依頼はユーザンまで護衛でしたっけ」

「そうそう。特に手ごわいやつも出なかったし、何事も無く終わったんだけどねーって、そうだ、もし時間あるなら今から一緒に飲まない？ユーザンでお土産買ってきたんだ」

じゃじゃーん、と取り出したのはユーザン酒。

ユーザンは酒の名産地として有名だ。こちらで買うと輸送費もろもろで少々割高になるが、現地で買えばだいぶ安く買える。

「ご一緒にしてもいいんですか？」

「もちろん。一人で飲んでも美味しくないしね」

酒のビンを顔の横まで持ち上げてにつこり、と笑う。

何しても絵になるなこの人・・・ああウェイトレスさんがキラースマイル直視して赤くなってる。

「俺も参加させてもらおうか」

「！」

すぐ後ろから声がした。

でた、例外その二、変態野郎。

「キース！お前も居たのか」

「ああ、丁度俺も一仕事終えたところでな」

「あの・・・」

「で、俺も参加でかまわないだろ？酒飲むんなら多いほうが楽しいぞ」

「はは、確かに！ヨルもかまわないかな？」

「・・・いえ、別に大丈夫ですが・・・その前に、」

「前に・・・なんだ？」

「離してくれませんか、手」

さっきから肩に手回してますよね？

「いやーすまんすまん、つい丁度いい高さにあったもんで、な」

いや、つい、じゃねえよ。

この変態はキース・グラント。変態いや、むしろ変態。キース・グラント

リーブさんと同じくS級冒険者で、私の身の丈ほどもある大剣を愛用している。

紺色の長い髪を横で一つにまとめ、髪と同じ色の瞳は切れ長でどことなくエロい。身長もかなり高く見下ろされてる感じがまたむかつく。

顔は均等の取れた綺麗な顔をしている。つまりイケメン第二号。

リーブさんを爽やか系とするならば、こいつはセクシー系、いやもうエロ系でかまわないか。

いつも何かただならぬオーラ（変態オーラ）を出している気がする。そんな彼は残念なことに女好きの変態である。見るたびに女の人を口説いているのは、気のせいであって欲しいが残念なことに気のせいではない。

そして、さらに最悪なことにこいつは私にも嫌がらせをしてくるのだ。

あるときは耳もとでささやかれ、あるときは今のように肩に手を回され、あるときは頭をなでられ・・・

どうやら嫌がる私の反応を楽しんでいるようだ、この変態は。

「ほらほら、離れろって。いい加減にしないとヨルに嫌われるよ」

「そんなことないさ。なあ？ヨル」

残念ながら手遅れです。

リーブさんが引き剥がしてくれてようやくしぶしぶ離れてった。ふう。

そんなこんなで、この二人が現在私と普通に話してくれる貴重な存在である。

・・・片方は変態だが。

「おい！ヨル！こっちこっち！」

「早くこないと酒全部飲むぞ？」

でも、こんなのも悪くないかもしれない。

第四話 人間関係は難しい。(後書き)

変態登場の巻。

あれーこんなキャラ出すはずじゃなかったのに。

でも彼をこれからどう動かそうか密かに楽しみです。

ちなみに、他の冒険者たちがユウさんを遠巻きにしているのは、イジメとかではなくちゃんと理由があります。

それにしてもリーブさんの口調が安定しなry

第五話 ヨルという人。(前書き)

初第三者視点です。

第五話 ヨルという人。

グラスに酒を注ぐ。

「つてことは、一人でレッドファングの群れを討伐してきたの!？」

「ええ、まあ。・・・噛まれないようにするのが大変でしたけど」

「はっはっはっ! 相変わらず予想外のことをしでかしてくれるな、ヨルは」

自分やキールならまだしも、まさか一人でレッドファングの群れを相手にして無傷で帰ってくる新人が居ようとは・・・。
毎度のことながら突拍子も無いことをするなあ、と感心したリーブであった。

思えば、ギルド試験が伝説の始まりだった。

S級の自分相手に剣を折るほど（まあ、ギルドの支給品なので安物なのだが）善戦するなんて、誰が考えたであろうか。いや、善戦どころかあれは―危なかった。

剣の筋は粗かったが、身体能力・センスはずば抜けていた。思うに、彼の剣はきちんとした師について習ったわけではないのだろう。

もしも、彼が剣をしつかりした師について学んだら・・・そう思うと一人の剣士として楽しみである。

次に驚かされたのは彼の初仕事の時だ。

そのときの仕事は確か『ルーピーバードの羽集め』だったろうか。ルーピーバードは綺麗な朱色の羽を持つ鳥型モンスターであるが、その羽集め自体は難易度は低い。むしろ新人冒険者のいい練習になる、ぐらいのレベルである。

しかし、ヨルの持ち帰った羽は別のモノの羽だった。

ルーピーバードの羽によく似てはいるが、ルーピーバードのそれよりも色が濃く鮮やかなそれは―カノンバードの羽だった。

カノンバードはルーピーバードとよく似た鳥型モンスターであるが、後者よりも格段に強い。特に急降下攻撃を喰らうと金属製の鎧がいつも簡単に碎けるのだ。

そんな凶悪なモンスターを平然と一人で倒してのけて、挙句、かすり傷一つ無い彼に急降下攻撃はどうしたのかと尋ねれば、返ってきた答えは『当たらなければ問題ない』である。

尋ねた冒険者の一人は完璧に固まってたな、そういえば。

またあるときには、とある商人の護衛をしていて倒した暗殺者の中にユゼル・ガゼルと呼ばれる暗殺専門集団の中でも名の知れた男が混じっていたのだ。

ユゼル・ガゼルは暗殺を生業にするグループの中でもトップクラスの腕を持つもの達で構成されている。

そのメンバーの、しかもかなりの手練れを返り討ちにしたのだ。

その話もあつという間にギルド中に広まり、そのころには他の冒険者連中から一目置かれた存在になっていた。

現在とはいうと、最早新人とはいえないその実力に他の人たちもどう接すればいいか計りかねているようである。

加えて、彼を近寄りがたくしているその原因は彼の容姿にある。

漆黒の髪に黒で統一された格好。試験のときにあれほどまでに強力な一撃を放ったとは思えない華奢な体は、いとも容易く折れてしまいうそうだ、とよく思う。身長は割と低めであるが、その雰囲気からそのことを微塵も感じさせない。

また、顔は大きなゴーグルとロングマフラーで隠れていてほとんど見えないが、近くで見ると綺麗な顔立ちをしていることが分かる。最近では、ギルドの女性達から密かに人気が出ており、彼と目が合うと顔を赤くして逸らす女性もいるくらいだ。これは女たらしのキースの立場も危ういかもしれない。

一度、なぜゴーグルをはずさないのかと尋ねたことがあったが、顔を見られるのが苦手だといっていた。昔何かあったのだろうか？

そして、今回のレッドファングの一件である。

こちらの反応がよく分からない、といった感じできょんとしている。

自覚はないみたいだね・・・

「普通、レッドファングの群れは前衛3・回復1・後衛1の小隊を組んで相手にするんだ。何しろ数が多い上に一気に襲ってくるから

ね。前衛が周りを牽制してるうちに後衛の魔術師が大技で止めをさすってのがパターンかな」

「ま、俺らレベルになれば一人でも余裕で相手できるがな」

「・・・一人でも問題ないんじゃないですか」

「馬鹿、だから『俺らレベルは』っていっただろ。どう考えてもギルド入りたての新人がやることじゃないんだよ」

「そうなんですか？知らなかったです」

「「・・・」」

本当にもう、この子は・・・。
隣でキースもジト目になっている。

それにしても、彼は一体何者なんだろうか。
これほどの実力を持ちながら今までヨルの噂を聞いたことは一切無い。
い。

どこの出身なのか、どこに住んでいるのか、それも一切不明だ。

一部では、その力と身にまとう黒から「死神」と揶揄している者も居る。

しかし、俺は彼を死神だとは思わない。

無口な子だが、きちんと話せば返してくれるし、礼儀正しい。

戦うときには刺すような威圧感が発せられるが、普段は俺からみたらぽやーっとしてるようにしか見えない。

それに、今だって目の前のパフェをいつもより目を輝かせてみている。

本当はこんなに普通な子なのに。

まあ、やることは突拍子も無いけどね。

「お、どーしたどーした、パフェが喰いたいのか？よし俺があーんをして「結構です」即答かよ！」

「アハハハ、いつそのことコンビでも組んだらどうかな？」

「それいいな！」「……………」

「そこまで正反対だとむしろ笑えるんだけど」

第五話 ヨルという人。(後書き)

リーブさん目線でしたー。

ユウさんもうやらかしまくってます。

リーブさん的には、ヨルは仕事の時には対等な相手、普段はかわいい弟分という感じですね。今は。

・・・とぼかしてみる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9587p/>

二重生活。

2011年6月3日18時42分発行